關水江南氏
金鵄勲章拜受祝賀句集

企　森美登里
山口芳里
後見　寶珠連

雫中庵宗匠評

軍扇を更て雄しき夏衣

武士の勲績何かん扇の面

伊勢剣に男子の祝ひ時鳥

なのまつさへ赤まて咲て名代の杉

中垣いへたてぬ三宋の葉ぐ

志ら菊の清きに大和心あり
ぬきん出て稀ふ咲ける冬の梅
角力場や積もさくへも男山
咲き競ひて他よりおくれし杉の赤
恵おく老り薫く初日あり

毋精の咲て薫るに菊乃赤　五山
旅人も香ふ行むに歩の梅
苦ち積んも其勢しに譽れ菊
凱旋のほい眼ふつくに初暦
根ながら色入の甲斐なのきく

魁け御代の世まれ梅

遠れの脇よ烟り強の者

武蔵堂を狩しと用の老ら

勲功を世ならて床し司百みとり

武士の子猛き心は二日矣

大殿の力ためしく子始め

海城て迎ひ来の姫

若ゆき〜老の海に白帽子

小男の早き年業に猛力

勝の子よ文ら嬢美の名誉

實玩連

燈立し堤の手のさくらかな　松戸　竹風

其の光の廣き扇の面のるる

一輪をひめやかさうな牡丹かな

枯るゝならぬ蓮れ花の百

拂ふうつ高の高き匂ひかな　竹風

蓮葉に色紙の形いよいよ眺め

昔打りの一と月見ゆるまゝ田べ

女房に男の鍋は　司石　粹遊

積雪よ香を焚きてその坊

夜高の蓮れに立し梅寺

まことに池に春うかぶ秋の空

拍子の中より開くて海寿子

ちよ添ふ嫁が園のなる牡丹かな

春めかしよ神代添ふ大矢数

茶の物探り出されて意ろかな　廉翁　一心

宿補よりと捨れて床しき菖蒲湯

其隣の規律守りて印地打

との国て後ろ見ゆらん雲の峰

絵りて蛙しを弱り行く酒

下たゑのから出て押切る猪角力

身の幸と雲井より揚しを春ぞ

軍刀に家の寶や土用干　吉田　詠石

拙筆を江南に乞ひよりの文け

りの春の暮れに高き稲まを

を拙や幾代傳に商造倉　合人

祝ふ昆布に代続ひ

高砂や死を根ノよる蓬の赤

若年ゆるよ教ひの庸く家　韓時　梅孟

子家よりは茅根なる牡丹ぞ

義の祝に何ぞよしよ蓬の主

世よ童の名は梅の玉の春
開きそめ扇の代の祝ひ初め
触てさよ童の手の花
里の名も香よりられて計家ぶ
仇浪を静めて風のあらそひ　梅合

雪を似る風に沿ふ梅の玉
乙鳥の春を賑はしき新調ぶ
野に山に更に乗用のとらぶ　不玉
百敷の年度の玉　土用子
寝惜みのさら程涼しき土色の家

雨の降る音聞くに徒勇力

高砂の松も幾世か経ぬらん

鶴によき歌じの友よ松の毛

梯上げの鶯聞くに春の風

仙家に酒湧き出づる三本の酒

依姑のおきすがたや鶴よ童子

石よ立つ程に失敗物一念

鶏高砂舞ひて鷲に乗る和尚

花に香よ立ちとぼきも花の雪

香をめてゝ塚に現くる青簾

寶玩連

人の香さへ雪まゝ更衣

ゆけばこゝも夏の袖郁梅の香

名を遂げて家のまとゐ生まし

功成りて立湖は棹さす月代

咲嵩の牡丹は狭き二間床

引留めて百色は餘るゆ杉代

摘む時の香は残りて子の餘

初秋の塗盃情し星の歌

待看て勤音床し神乗月

万世のむつみ深れ金衣多

我が孫の屋敷清らや場の主

月代さす屋敷戸の水祝ひ

吾も楽よ吹し樽て夕涼し

屋敷しま吹しゑ間ちゃん走りの音

色よ出て香よい清ら柳の芯　青柳

漏れて来る謡ひの切れ花の真

旅人もゆめて通る宿

博士出る家といえん糸瓜の戸

鶯を射る屋敷場の松　五山

土地の名も共よ場ち紙　鳶

寶玩道

冠けて梅一輪の夢ぞれの事

故里へ錦や飾る石

猪名川の春の心備へる一と位

雪景を踏みくぶる光の兄

鶯の人に絡の春衣姿

薫風に位立位の春の黄金太刀

咲き匂ふ皇恵の山桜

負けぬ春に大和心枝雪碑

遠れと狗と輝く初旭の石

清き岳てし乱と云れぬ端午の

寶林堂

雲ちぬと彩よゆ持つ暗すな
三千くるから生る蝶の日知ら
日と共ままぬくらみや海苔子
入り初る教へる濃の月こ
日の暮れて集る庵の今ぐ

なりかたき大師心六四方拝
ぬのくと吹け故れる初日ぶ
なん行ちぬ天の暮れ来る
待つ妻の表こをうみと山
水底の月静の寄ぬとこ

蓋 うれしさは いわもとにつる千代の春

蓋 ちゝ里より名高き雲井さくらゞ

蓋 鯛に ちゝ玉宗にし 初鶴男

去年より 平安より 春の玉

功遂げ名のさし 蓋る紙衣ゞ

蓋 嬉しきて 今日の雪 着衣始

雪折れ 風折れ なき 柳の糸

蓋 濃く 移 流れて 広ぬ ぬ

蓋 若葉して 末物 ゆ き 柳の

九のさして 起五 雪の 井

寶玩雜

若き名やかへて祝ひ[illegible]の毛

まゆ若き柳のかけや去の日

老て春本をしやさしく抽る事

長寿さ宮向ふ利根の黒帆尖帆

乾ひの法ゝ重り合ふ茶の酒　まよし

味ゐとい嬉しく春の初便り

女石の船の長くなる初燕

身ゝ餘ゝ誉れ同じ白同石

猪豚の縮雪泡の灯の光り

為鳥の玉花句ゝ掛ける事

公達の方試みに小杉引

真昔しの名ながらせて柳の玉

曲水に酒と勢の金弱の名

年寄と家の誉れに牡丹の戸

祝ひし大和心に高砂太刀

岩

水面に見る浮き沈く長閑

心くに日ときて野梅の白梅

雨のとの空春に会釈の秋

岸かなを越きい山路に雪の杉

花戦さ年は本男児と誇らん
満洲を踏み点じ雪 砕
作らせし青田眺めて愛で
六順の耳十初音の時鳥
凱旋の旗ひるがへして高潮酒 柳有

義を張りし弓ゆるめぬ栗山
身の誉れ家の誉れ禍の世に
江南の梅の杖小く翁の手
嬉しき高砂兵稍の世に 詠石
戴く人々軍刀や土用干

さいの土産に錦着ると雛を

幾度も重ねて咲くと牡丹

新米に照りを産みせる橋上

色增して留守祝ふらん神の松

麻を焼く人の撰び能の本

猿部の毛抱を搾る高音に茶お

ぶりを戒めるし土用干

つと入る軍日記を見られる

よく開け切り込む樽の主

出干六出先に出る感状

冬ふかき野の草むらの陰なる日和

濃とした白菊をみて曙や野の梅

凡心も冬ゆるき野の牡丹哉

蓋

ふきぬけし碑よりなられて京芝

蓋

踏碎く音の霜柱

咲き出して世に香りを泥の梅

小さいのを徒坂れて宮角力

梅上けて黒髪山も笑ひけり

凡られのも同くものもなし朽の西

視よりも伸び方りて仏丈

南方の色よ雄らを雄らを
雄るる方よ雄らを雄らを
雄る山詩て聞らて
白菊や祝じの床よ香の場ら
白玉のら見えて懐かし香の富士

人〻武士花〻僧侶の樹の東
天晴れと朝暮けら競馬
負けぬ〻流石男の子よ地形
猶高き其名は薫る大廣間
清高き雄にしき振濃り

白妙の旭の映る金屏風
ゆかりと梅薫る閨の門
六二の嶺の裾ゆらし初霞
新田しく思ふ我きや春日向
苔る敷て述け暮く暗の明渡

孝の名富士より高き序の百
晴めかを卯月乗月の簾哉
雅く風に重なる稲穂哉
燻びから花と見て立て浦幸
仙人浦幸の塵よ深まぬ色

帆柱の霞に戦きぬ柳市

戸口から出で花見よなの花

今山に暮て寂しき鹿の影

芦の葉のさり合ふ音や冬の月

枯葉より松に変らぬ冬の雨

駄け足で行くや花見の酒迎ひ

掛額の高さも曇るや時雨合

待時に舞てよなり 塊象

軍人の裏表なし反古帖 西山（キマカセ）

蕨の一茎て送る初手紙

出家なるゆゑ山に桜咲時

元石の家に二のとをりに春の色

学人に対して一刻其調子

乗り物を下りて又橋を董に

なつかしさの方や初鶯

[illegible]迄も朝に北区用に花の枝

よく話し豊みて戻る初の事

高濃し早稲は香る三日の月

別に吹く風ら[illegible]の所迄

馬柵杭に柳枝[illegible]て戻る

武士と云ふ名の苦しき樹の志
さゝ浪を深き紅葉の綿う毒
魁の白まれし樹の野の白う
猪雷山岡の勲を庭のう
雪裏の苦き猪て樹の毛

風に香よ立つ弱山の表多バ
吾妹子青き中よ弱の色 一麿
無心亀掘堤けて這入る新
最か胸よ下を礎や稲の痕
鎧着て吾海ろ山土岡干

寶珠庵

梅咲くや家憲厚き冠木門

大將と孫をかさめて幟の事　詠石

年毎に栄ゆる庭や蕊の巣

親の名を續て豊の紙たば

富まし高くと梅を植

元日奥の方現く祝ひ酒

春平の祝賀條を年の礼

遠くのら見える祝ひの幟の事

摂待の法度は過る祝ひ酒

先つまるを越て同じ年の坂

金雲の其の威の振るふ日の光り

我位に出の如し寶永

出の花の咲くと思ふ花を眺む

富士の見る事 鯨つき 舟形 杉雲

先つ雪消て同じ色なき百合の蕾める

多代と呼く在同じ色し紀之国

敵と的し陣中の動を指みる

咲き揃ひて光り輝く牡丹哉

金閣の咲て趣の深りけり

裸木に錦衣なき百合哉

やふとなき言葉物ゝ不同石

息ゝ吉の一つ や二の矢

関ゝ名ゝ遠れ近し富士

高木といふ名も梅や色地味

杉ゝ木の同なりけり秋の月

情緒ゝ五大洞を乗まわり

動意ゝ床ゝ飾りて福ゝ田

蓮葉ゝ床ゝ豊うる飾り物

身ゝ近雪の姿ゝ富士詣

天地ゝおれ一人ゝ老ゝ

東平の鎧よ恋しし俤の春
備ひし徳ゞ名家なる枝の花
角樽よ恋ひて世々の桜綱
植初め世界ひ恋しき門田代
奥嶮峻の橋架くる夜更衣

鎧着た昔ゞ物よ忘れた
来る人まゐりて白玉筏
簪よ落ぬ男れ忘れ待多
抽し出て杉のみ青し秋の山
霞を生し昔の夢の縁布団

日の春と言いうる玉の桜の事

呼合して郭公を過ぎて行く

涼しさ一本男の素面相

月新に覗く秋の鈴の音

色も程床しさの項中に

酒壺の移る葉をうつす鉢の秋

降る毎にあり落ち花の雨

黄ばむ心の酒ぬる菊の事

風に流る焼辺の杉の実

黄鸝の啼返しの石河原

寶玩道

一輪を家の幾曙や牡丹

袷着て都の風や吹くれて

鷺を見て居れば吹く人青葉　廉素一仙

其の徳の世に現れて勝石

初鰹六月けの空を吹

ようは是の咲たと思ふ牡丹哉

待て春大きく見ゆる角かな

堆く薫る木の根ら付

吹けて戸に来る杉の初便

天の代の静かさを舞ふ蛍哉

乙鳥や暖簾掛れば日の友

血痕の名誉の勝ち上る子

接吻の色抱き殺すべし

去年今紀念の接吻長し

勝負かな喧嘩して面白

痕

音のおくれし涼し嶋の月　文禄

花散るや袖吹く迄の和風

いろいろの色稱り初茄子

肘張りて戻る日ゝ枯れんず

何鏡見るなら山の矢じり

朝顔に染色知らぬ色のみる

名月に音なき海の邊にあて

乙鳥や何を忘れて中かへり

長閑さや昨日の変る梅の香

勸農の家ゝを立ち見て燕

雲井よりも面〳〵忠義に年男

高市や鼓て閑く大廣間

はし社の女杉男杉も初春

雨一日といふ言はれぬ柳の雨

室咲の梅よ桜よ春の色〳〵

天皇よ入るも畏さの田植の事　美登里

ゆるきなき代の恵しの鏡餅

待亀や其名高へ食鶴鳥

厳かの角武備なる牡丹代

若き代に太平乙葛蒲太刀

雪の朱白玉椿の赤き味き

待つ甲斐の月も待乳や時鳥

豪振て一と位持つ紫陽花

常盤朱の月よ立つ色の初雪

汲めい汲む程尚清き代

初雪や霞助の[illegible]小揺き

初陣の誉れとなる[illegible]小杉軍

名に高き富士の高嶺や夏きき

芽ぐみ出るやうな月夜の栗山哉

猪竜方土徒のうす花の咲

鍬持て鋭く換へし春の野良

色囲しる夜を思ひ星月夜

百石に確なる創技場の主

三軍の士馬も肥て秋の風

燦爛と光る衣装に縣居

寶玩道

たのしからぬ世の老てゝ橋綱

老ゝ深ゝ若葉ゝ新の雨上り

我も又世はまれなる錦の角

合き稽素やはまれて雲井近

仲もらの中に気高き雪の杉　半流

一ゝ日ゝ日ゝ深ゝて伸ゝ柳ゝ

老木ゝと童ゝの高ゝ樹の毛

常盤木ゝおめぬゝしの野深き

不士と見る計ゝし嫌ゝ五月晴

身の長ゝを重ねて着ゝ渋紙　右

疲れゐる客振床しく居籠の席
幸酸の切顆れて司めし
船上り袖ゝら風の薫り市り
春風や駒の金鐘ゝ軽く吹く
人ゝ道よけて通る苔の水

七草の中よりおけて女郎花
雪積んでゆめ見る峯の杉
初空や雲井よりくく鶴の群
庵の夜咲き廣ける牡丹哉
競べきものなき蘭の香りかな

南湖を羽織れいきて渡る一

八重咲しの花はえて衰ふ桔

なりの為き世はめくらず来て家の主

白牡丹春の寿を賞め奉り

尽しある功のえて寿の家

蓋 弾更に自ら言葉する牡丹の

蓋 人浪のおつ六角方の土俵入

蓋 海を空へ昇りて海もむ社の日　一心

蓋 雨だれを潜りて夏の日和ば

蓋 涼しさ六神は奏る八重撥

潮浴して深く潜る事数分　一心
花咲て二度の産着と祝ひ
数多の玉の冠に稲乃花
神風に吹れて居る初袷
一と筋を耳に正月のとゝきす　一心

動功の組盃に御代乃春
文と武と居ゆる事作り
潔きよ花形の香味よし彩の雑子
廣き野に餘る高麗物百産
いきなしい姿の赤松の主

吟風弄月の者とこゝろは事を

人目よりも刈り高の稲の穂の穂刈り稲

鷹打て来たり高き山路八

雨風も知らぬ振して蔦紅葉

出羽千秋の積み重ねたる社俵

同じ日さそひ友たちなるる小殿原素京

勲章の由来話に来る乃雨

帝室の藩塀おらん牡丹の庄

長坂よ蛇行して紅葉敷る

枯野十里を北帰の社掛地

水仙や雪さゝ原ぬる春の色

咲たとて噂薫るや菜の色

幾代も匂ふ大和のさくらぶ

雪霜を凌て厚ぶや梅ひらく

小枝まてあるや菜の大まさき

今つゝ光り輝く初の春

開ゆ白さの祝の床ゝ福寿草

大丈夫の胸よも匂ふ黄菜ぶ

盃ようつる錦ゝ菜の宴

蝶よりも身軽ー花の人心

水仙の水よこはるゝ香りかな

久離る机の上に稲子老

磯山に岩躑躅の日ぞ枯の日

小春や水の江れ急ぎたん

霜寒に高穂を変る朝の月

減りゝせて玉の光りに代るなり

不二よりも高うゝゆる蝶一つ

江戸川を利根のはさまる桃の宿

茶屋て住居の狭し隠れ春

健さる君の祝ひに家根かな

寶玩道

数高の真名と壹ゑ山さくら

四君子の題しゐ梅乃も

智仁勇胸よ輝く樹の主

蕾ゑら人の目めたら牡丹ゑ

適れと床よ咲ゑ福寿草

奉公の二字尊し筆始め

主臣〻玉の雫い三年の主

忠玉の至情〻あつき武士ゑ

倒ゑも任務〻果を果さゑ

志咲や勲章ゑ文の授与会

鶴の翼に齢重ねし神の杯

坂の月望叶ふ日数かな

金屏の透こそ見ゆる青簾

未廣き春の机の重きかな

童らと咲ける花の名を問ふ　一心

山吹に活けて添つゝ弱心

杖に吹かれ心や初袷

通れる出来る名人今酒

ふさ〳〵を湾らて床し洗紙

雨晴のうしき余よおぼき紅葉

功名を高くして戻る浮世の
行軍よ原よ〜有き清水
行く末〜家毛の桜印地打
なぶの金鶏上けて春さる
を井迄其名高く物を庵

末〜海よそ〜保山の雪解の
ちよ形〜と何を悲る庵の子
今ぞ水うき節さらく伸ひよて
追ひ来りて焼〜庵の故きかな
咲ぬ花はたの〜ふ春の樹

寶玩道

名よ之百之芝居床也箱の表

場いりし軍刀床しく牡丹

玉の名を揚げし名跡に関角力

人中を掛分けて七ツ角力

おゝしろく花のなる春しら

寶玩譜

身の誉れ家の誉れ名石

八朝に珠更高き不二の山　一仙

遠さある物うとき部分

竹よ花の咲くに遠方の棚

勝よ麻白子とい更に関角力　一仙

寶珠譜

梅よ月花のもとさる詠めの事

梅咲くや水白高倉のすぐる道

柏色よ鳩の集る社日の事　桂林

蓋よ年鶴に溶くる夷講

春ゑ八大師心地洗る雨

機嫌よき小鳥の彩六面生の建

鶯の名に花ゆれとゆるる計よ

紅の徳よ狐あら長時多

蓑毛ゑる鷺足長しき春の雨

月の出てはつきり梅の匂ひ

憲章の時輝くまさ事

鈴負の本庄時てなる秋の夜

鴛鴦よ鳴う似る梅蝶二つ

義士の名に誉れや雪の敵討

つまる日の系図に長き影細し

章建のから出て光りなる蛍哉

ちき樹を訪ふ鶯の鳴ける

丹精を拾ひ問めたらぬ人の

説じる夜のから考る大願寺

名月の曇ぬ人とてるかし哉

身に寄る日よ廣うる花の力も事
なる餘のつゝし初の花の姿の風
同さ名れよ春風けるし土筆
黄昏の花見る妹の顔ぶき
軍学よ霧吹き破る剛の下

老木てゝ色香に若しし花の見
実よ赤の実多多り池の蓮
一心の届ひて嬉し柔木乃毛
奥深く話しの刻に祝じの日
千年の祈めに庭の牡丹

手ーさ六ゆつくゝ香を式七日
居籠後も戦捷祀念の小盃
おこらへて又見る式の七日まる
色の式香の香ゝ九月り家
動意の佩用床ゝ家の式

時ゆつて存意の光りゝ初日文二
待角日男の手の男まる
香よ心うつれい白ゝ剛乃枝
歎よ垂くとゝて文二治
色ゝ香ゝよき待年の誉れ

戦陣の勇士おゝとゝ杉魚吉

練り上げ白毛美人や猪角力

数多く喫して勇ましき牡丹　五山

朝霧を鳴き晴れ白雉子

月精の甲斐ある人や色菊

勝角力の砂を掃ひけり

春の沖集る涼し

先つ開く月の武蔵や初暦

若鮎に桂材らしき春の雪

金屏の杉よりも風土用干

物の秀でたるの滅れ易き一童垣
二十の程風よけたる牡丹の
絶ぬ情筆を記きし初長の
和らぎ自文の康成の歳暮もの
爐開きて傷らを居ら一人孫

猶常に回し苟てい育てゝ
立人の新しき高し初の出青柳
金鶏といふ其名庭しき事の毛
百されるべ尽の憂れて深初
とたとるく肩身の廣し司百

霧を出し白昼の照射べ
鷹狩の流石の慣れし渦巻
北華蓋
太刀佩き昔の夢の名さつもり
高輝き刀又はと守けい軍士おり
高を攻めて拔き攻められし時の事

帷子の胸を動き脇時計
陣中の始め輝く動き事
沙の出胸を尊とし大章
木枯を吹かれて岳を蹴げ兵
北華蓋
沙香や作候兵の靴乃跡

輝くを鶴亀よの末永
昇る旭の輝く大和魂
素養なる智仁勇の楯の
厚藤の香や勲章なる文の絶念益
楯の主文武の智恵を備へ

寄木や今や勝れて雪乃杉　一心
枯咲くや春らぬ里の花菖蒲　仝人
人よ咲くまといの主まつ百
新宅の棟上げるうぶ初玄鳥
神の祝童子七五三の戦く度

[illegible]の上に空や杉の赤
取りて若葉の中の楓の赤
母持の[illegible]ひ[illegible]赤
幾年経しか身の果枯の赤
教[illegible]の中より桜[illegible]

去年の夢さらと解て[illegible]
風冷しとの鳥[illegible]て[illegible]よ京色
新蕎麦や我家をからも寂心
床の間に牡丹咲のあるかり　華耕
心地よきものよ春日[illegible]

門口より錦を敷き玉緋桃の
枝の水の花代と云ふ心太
香よ咲く恋や紅梅の砕心
活け恋の色濃ん えんそう牡丹
日よ出さい光り艶やかり今年来

蓋
鄙の歌 鏡餅
年が明ける心地豊ふ白牡丹
蓋
雨晴れて杉静ふなる日
同じ名ふと強ふられて酔ふ紅梅
鉢植の梅の表ふ露の玉

死して石の残る蓮れかな　涅槃像

家業のへちま玉旗の夢まゝき

生鶏でも賜から切で物売

戸やしてゝ秋に隠れ虫の形

夏きさ岩根を細る清水　柳春

積善の家に栄えて有牡丹

海法く俄月底に夏の来る

櫻門の勅願寺しの柳のもと

暑くしき夜のあけぶりや京の山

就中朝のさしみや花の宴

四めらるる花の門の柳桜

看心い姿し生平の春の夜の

冠と云ふ沸ぶよけれ今年酒

勤章を賞をて頂く祝の年　半流

勇ましく霞白はしら有る根

二ツ三ツ五ツ六ツ七ツ塔木ぐ

井筒きく米白蹴鞠の音時分

九ツ人も見る梅の笑ひ門

四方の空生み海ら〻ら秋の夕

姿しさの家して濁を清明ぐ

岩よ亀甲式い動のぬ長寿ぞ

人ゝ玉の海や　杜若

出芽　稲の穂さ心地よき

花見　花見宴汚れ知らず物思しき

初恋　初恋の人えて嬉しき都かな

恋よ樹山よ接ぶ年木椎

塚柿て神の灯しい清きかな

禁人い禁ぶる場い新ぶる

怨霊の廻ゝて嘗や閑庵力

行秋　行めい柿の香のゝて湯く情分

同情の家庭より咲くべき年の春
花咲くべき動産なる文の祝ひ酒
江東の和つきべき梅童より泳石
咲き満ちて風も通らぬ桜ちる
咲き残る蕾れい高き桜かな

寶玩連

同じあさを流を長さん水祝
枯の茶水に月もや花ひ解
夕ぶこを同の茶よりきなば
桜ぜる一本枯かみ木立
待つくるまを戸叩く句郎

色心も花も咲きこゝ　宮川

忘られぬ心のよすがを沼しは

集まりて咲も丸き日和哉

情なく燒も焚て神事哉

今日も暮る月も隈なし　板の宴

勝負の初時の刻

戰場の春雨　柳也

一と枝て四方よりさく梅哉

四面より刻の響う物哉

潔よく射止めて嬉しき始め

以上五百八十五章